

MUSEUM News

秋田県立博物館ニュース

当館企画展

「レピドプテラ～チョウとガの自然史～」より

(7/5(土)～8/24(日))

ミュージアム・クイズ

上の写真は、とあるチョウの羽の拡大写真です。
さて、何のチョウでしょうか？

Ⓐ オオムラサキ

Ⓑ キアゲハ

Ⓒ クジャクチョウ

(答えと解説は裏表紙にあります。)



目次

表紙・目次	・・・ P.1
企画展・特別展紹介	
(予告) 特別展「菅江真澄、旅のまなざし」	・・・ P.2
(報告) 企画展「魅了する色と意匠 ～あきたの染めと織り～」	・・・ P.3
資料紹介	・・・ P.4
(先覚部門) 「西本願寺入蔵命令書」	
(民俗部門) 「盆馬」	
学芸ノート	
(生物部門) 展示に不向きな小蛾類を 敢えて収集する	・・・ P.5
(歴史部門) 竿洗祝儀	・・・ P.6
(学習振興班) 科学の出前授業	・・・ P.7
博物館の日常風景、表紙写真説明	・・・ P.8

表紙写真 企画展「レピドプテラ～チョウとガの自然史～」から

展示予告

平成26年9月20日(土)～11月9日(日)

特別展 菅江真澄、旅のまなざし



江戸時代後期の紀行家・菅江真澄は、生涯にわたる旅の中で数多くの著作を残しました。その内容に庶民の日常の暮らしや当時の風景があらわされていることから、柳田国男が「民俗学の祖」として高く評価し、全国で紹介したことで知られます。

特に本県では、秋田の歴史や文化を語る上では欠かせない資料として扱われてきました。まさに、秋田を代表する文化遺産の一つです。真澄の自筆本の多くが個人蔵であることに加え、資料保護の観点から、真澄が描いた図絵を紹介する機会は少ないのが現状でした。本展では、重要文化財「菅江真澄遊覧記」89冊を全期間全冊公開するとともに、その他の自筆資料を多数紹介しながら、図絵に描かれた実物資料を展示し、真澄が記録した北国の暮らしと文化を紹介します。

秋田県を会場に開かれる第29回国民文化祭・あきた2014の開催に併せて、秋田の地域学の原点であり、秋田が全国に誇るべき菅江真澄の記録を紹介する展示です。

展示構成

- 第1章 菅江真澄の旅と著作
- 第2章 真澄の肖像
—うた人・くすし・旅人
- 第3章 いにしえ憧憬
—遺物と歴史の記録
- 第4章 祈りの風景
—仏と神と
- 第5章 暮らしのかたち
—北国をつむぐ
- 第6章 あきた遺産として



見どころ

- 重要文化財「菅江真澄遊覧記」89冊一挙公開
- 秋田県指定文化財、個人蔵自筆資料など多数公開
- 真澄が描いたモノとの対比
- 「真澄のいる風景」写真展（ロビーで同時開催）
- 多彩な付帯事業（期間中の毎週土曜）※

※詳しくはWeb「秋田県立博物館」で検索！

平成26年4月26日(土)～6月15日(日)

企画展 魅了する色と意匠 ～あきたの染めと織り～

企画展「魅了する色と意匠～あきたの染めと織り～」では、秋田のくらしの中で育まれた数多い伝統的な工芸品の中から、染めや織りについて、色や意匠へのこだわり、製作技術などに焦点を当てながらその魅力を紹介しました。

また、当館では伝統的な絞り染めの技術の保存・伝承や生涯学習の振興をめざして博物館教室「楽しいしぼり染め」を実施しています。平成24年から25年にかけてこの講座に参加の受講者が、技法に工夫を凝らして制作した作品による作品展を併せて開催しました。

この展示を通して少しでも多くの方々が、秋田の伝統的な染織技術に関心を持ち、「秋田にもこんなに素敵な染め物や織り物があったんだ」と感じていただけたなら幸いです。

企画展の開催にあたり作品をご出品くださいました受講者をはじめご協力いただきました皆様、足をお運びいただきご観覧くださいました多くの皆様に心からお礼申し上げます。

展示構成

【あきたの染めと織り】

- 鹿角紫根染・茜染 ～華やかな色彩と優雅な意匠～
 - 亀田ぜんまい・白鳥織 ～素材を生かした機能的な織り～
 - 秋田八丈 ～趣ある色合いと繊細な意匠～
 - 横手木綿 ～豊かな色調と多様な意匠～
- 展示資料：着物類、反物類、小物類、道具類、見本帳等 約100点

【博物館教室「楽しいしぼり染め」作品展】

- 秋田の絞り染め
 - 教室の概要と活動風景の紹介
 - 各種絞り製作技術の紹介と製作工程見本の展示
 - 作品紹介
- 展示資料：絞り作業工程見本、浴衣類作品、反物類作品 約120点



「あきたの染めと織り」
展示風景



「楽しいしぼり染め」
作品展



藍染めの藍の種プレゼント (4/26.27)
「育てた藍でぜひ生葉染めに挑戦してください」



「楽しいしぼり染め」受講者による絞り作業の実演
(会期中の毎週日祝日)
「こうやって絞るんだあ…気の遠くなる作業ですね」



ハンカチの藍染め体験 (5/17.18)
「世界に一つだけのオリジナルハンカチです」

(工芸部門：藤原 尚彦)

先覚部門

にし ほん がん じ にゅう ぞう めい れい しょ
西本願寺入蔵命令書

多田等観（ただとうかん 1890～1967）：秋田市土崎出身のチベット仏教研究者

大正2年（1913）1月16日付で西本願寺第22世法主大谷光瑞の発したこの命令書が、青年多田等観のその後の人生を決定づけることとなります。入蔵すなわちチベットへの入国は、約百年前のアジア情勢において命の危険さえともなうものでした。同年8月、チベットをめざす等観がインドを発つ際、何よりも英国インド政庁当局の監視をくぐり抜ける必要がありました。

この文書は、チベット国法王ダライラマ13世と大谷光瑞との留学生交換の申し合わせに基づいて、等観が正式な留学生であったことを証明する貴重な資料です。長期間チベットに滞在すべきことや、研究の進め方についてはダライラマ13世の指導を仰ぐべきことが記されており、結果的にチベット僧としての修行は十年に及びます。もっとも、外国人がたった十年でゲシェー（仏教哲学博士）になり得たこと自体が異例中の異例、かくして「チベット仏教を血肉とする研究者」は誕生したのです。なお、秋田の先覚記念室企画コーナー展「ゲシェーになった男・多田等観～日本人が見たチベット～」は9月27日（土）～11月30日（日）に開催します。

（秋田の先覚記念室：今川 拡）



民俗部門

ほん うま
盆馬

みなさんはお盆にご先祖様をお迎えしたり、お送りしたりするために、どんな乗り物を用意されていますか？ナスやキュウリの牛や馬でしょうか？それとも別の乗り物でしょうか？

写真は湯沢市松岡地区の盆馬です。これに乗って、ご先祖様が1年に一度、遠い旅をしてこの世に戻って来るのです。馬だけでなく、馬をひく人や弁当なども、ワラや苗株で作られており、ご先祖様が長い道中困らないようにという、人々の心づかいが感じられます。

松岡地区の盆馬は、旧暦7月6日の夕方に家の門口や道路に立てられ、16日に盆棚の飾りなどと一緒に、村はずれや墓で燃やされました（現在のお盆は新暦の8月に行われます）。



湯沢市の隣の羽後町では、ガツギの葉で馬を作りました。6日の昼に迎える自宅の方へ頭を向けて下げ、16日には送る墓の方へ向けて下げた後、夕方川に流しました。ご先祖様が道に迷わないように、馬が誘導しているようですね。このような盆馬は、以前は各家で作っていたそうですが、今はほとんど作る人もいなくなりました。

右の写真は、今からおよそ10年前にかほ市象潟地区で見た盆馬(?)です。最近では、こんな風に乗バスや車などでご先祖様をお迎えすることもあるそうです。

乗り物は変わっても、毎年お盆の時期にご先祖様をお迎えして感謝の気持ちを伝えることは、忘れずに続けていきたいものです。

（民俗部門：丸谷 仁美）



展示に不向きな小蛾類を敢えて収集する

昆虫の中でも特にガを長いこと扱ってきた者として、チョウに比べると「不当に」嫌われているガにもっとスポットライトを当てて紹介したいという気持ちは常にありました。ガの種数はチョウに比べてはるかに多いのです。日本国内について見ればチョウが328種、ガは6,071種（神保，2011による）と約20倍もあります。種の多様性について語るならば、当然ガがクローズアップされるべきではないでしょうか。今年の夏の企画展「レピドプテラ～チョウとガの自然史～」の構想では、できるだけさまざまなガを展示することが目標となりました。

ところで、ガを大蛾類（macrolepidoptera）と小蛾類（microlepidoptera）に大別することが慣習的に行われています（チョウも大蛾類に含まれる）。名前の通り、大まかには大きさが違うのですが、例外も多くあります。この大蛾類と小蛾類を比べると、実は小蛾類の方が種数が多いのです。科の数でも小蛾類がずっと多くあります。さまざまなガを展示するということになる、当然さまざまな科の小蛾類を用意しなくてはなりません。実を言うと、今まで小蛾類はあまり熱心に集めてきませんでした。小さすぎて標本を作るのが難しいことと、図鑑だけでは同定できない種が多いためです。

そこで数年前から本腰を入れて小蛾類の採集と標本作りを始めました。どれだけの種が採集できるのか、どれだけの科をカバーできるのか、全く見当もつきませんでした。3年目くらいになって、案外多くの科をカバーできそうな見通しが立ちました。日本の鱗翅目は、研究者によって意見は違いますが最新の図鑑に従えば、87科あります。そのうち80科くらいまで採集できてしまったのです。何であれ網羅しようとするのは、博物屋の性なのでしょう。87科制覇を目指して、展示まで残り1年ほどの間にかく小蛾類集めに集中しました。たった1個体しかないある科の標本を誤って壊してしまったり、沖縄で採集してきた中に採ったことのない科が含まれていたことに後から気付いたり、一喜一憂の繰り返しでした。また、ど

の科に含まれるのかも分からない種が採れてしまうのも小蛾類ならではの。色々な人に聞いても未だに科が不明の標本がいくつもあります。標本の追加を目指して今年の5月いっぱいまでは採集をしていましたが、時間切れ。やはり全87科をそろえることはできませんでした。知人の助けも借りた結果、83科を展示することができました。この過程を通して、私自身ずいぶん勉強になった部分もありますし、小蛾類の魅力も分かった気がします。次々と見たことがない種が採れてしまい、そのうちいくつかは本当に図鑑にも載っていません。分からなかった世界が開けていくのは、刺激的な体験です。

小蛾類には美しい種もいるのですが、顕微鏡で見ればの話であって、肉眼ではよくわかりません。どこが違うのかよくわからない小さなガをずらりと並べてみたところで、小蛾類がいかに多様であるかが伝えられるという自信は全くありません。せめて、こんなものにまでいちいち名前がついていることとか、わざわざ採集して丁寧に標本作ったりしていることに、ちょっとびっくりしてもらえればありがたいというのが、企画した者のせめてもの願いです。



ニシキヒロハマキモドキ（西表島産）

案内してくれた方のおかげで何とか採集できました。日本のヒロハマキモドキ科は、この種を含め2種で、いずれも南西諸島に産します。写真下の線は1cmを示します。

（生物部門：梅津 一史）

竿洗祝儀

■竿洗祝儀

江戸時代には、百姓の年貢・諸役の負担量を定めるため、耕地や屋敷地を測量する「検地」が行われました。領地全域に及ぶ大規模な検地のほか、新田開発や畑の田への変更などの際に、小規模な検地がしばしば実施されました。

秋田藩の農村では、検地の終了後に「竿洗祝儀」という儀式が行われていました。以下は安政6年（1859）11月9日、三又村（湯沢市）で行われたその内容です。

- ①藩の検地役が羽織・袴をきて座敷に着座し、その前に灯明・神酒などを供えた机を置く。
- ②水を張った盤ぎり（たらい）に椀を二つ入れ、その上に検地竿を3本置く。
- ③足軽が椀で竿に水をかけて洗う。
- ④肝煎が進み出て、拝礼し両手で竿を押し戴く。そのとき足軽が水をかけて祝う。
- ⑤ついで、長百姓・世話方など関係者も水をかけて祝う（当館蔵茂木久栄家資料「万代日記帳」）。

このときの検地は、三又村で新たに開かれた田畑を対象に実施されました。11月5日に藩の検地役3名、足軽2名、雑役夫1名が来村、検地の作業は8日に終了、9日に竿洗祝儀、10日に離村という日程でした。

④⑤は水を人にかけるのか竿にかけるのか不明瞭ですが、次によれば人にかけたようです。

■泥を浴びせ、水をかける

『秋田沿革史大成』の著者、橋本宗彦が幕末に境田村（美郷町）で見た検地終了後の儀式は、次のようなものでした。

- (1)①田の中央に机を置いて神酒・灯明を供え、道に郡奉行・郡方吟味役・検地役・親郷肝煎らが着座する。
- ②田の神と称して猿のような顔を描いた男が進み、拝礼して神酒を頂く。戻るときに周りの人足が田の泥をかける。
- ③ついで親郷肝煎や村の肝煎など主だった村人が拝礼し、戻るとき②と同様に泥まみれにされる。
- (2)ついで奉行の宿所で「御竿洗」を行う。

①水を張ったはんぎり桶の上に検地竿を置き、親郷肝煎から順に、竿をたらいの水で洗う。

②一礼して帰るとき、居並ぶ壮年の者が頭上から水を浴びせる（『秋田沿革史大成 下』p100）。

これによると儀式は2段階に分かれ、(1)田で行うものと、(2)奉行の宿所で行う竿洗祝儀がありました。肝煎たちは(1)で泥まみれにされ、(2)では頭から水を浴びせられます。着替えたばかりの服を水浸しにされる様子がじつに面白い、と橋本は記しています。

■農民のユーモア

橋本の談によると、このとき村の豪農で普段から高利で米金を貸し小作人を苦しめている者がいました。彼が田で拝礼したとき、泥をかけられ、あぜ道に逃げたところを田の中に組み伏せられて泥水を飲み、見かねた郡奉行が「祝も余り甚し」と言って制止する一幕がありました。

この境田村の事例は、児玉幸太氏の名著『近世農民生活史』に紹介され、氏は「これは百姓の死命を制する検地の時である。農民は勝れたユーモリストといわなければならない」と評しています（『近世農民生活史 新稿版』p35）。

なぜ泥や水を浴びせる必要があったのでしょうか。検地は年貢を取る側、取られる側が、顔を合わせて行う作業です。それによって農民の年貢負担が決まる、緊張をはらんだプロセスです。竿洗祝儀のユーモアは、検地で高じた緊張を解き、平穏な日常へ還るための知恵だったのかも知れません。

（歴史部門：新堀 道生）



検地のようす（打合せをする検地役人と農民）
（「羽陽秋北水土録図絵」）

科学の出前授業

博物館では小中学校の理科に関するセカンドスクールの利用への対応を自然展示室を中心におこなっています。また、野外で実際の露頭を前にして小中学生の皆さんに館職員が地層の成り立ちなどを説明する授業をおこなうこともあります。ただ、近年は学校が種々の教育活動に時間が充てられたり、バスの確保が難しくなっているからか、学校団体による博物館利用や露頭での観察に館職員が呼ばれることが少なくなっています。

そこで、小学校6年生の「大地のつくりと働き」の単元にあわせて、化石や剥ぎ取り標本を学校に持参しての出前授業を2年前からはじめました。テレビに映した男鹿半島の安田海岸の露頭を観察しながら地層の成り立ち、観察することでわかる当時の環境や堆積した時期などを質問を織り交ぜて説明していきます。また、地層を構成する化石や砂岩、泥岩、火山灰などにも実際に触ってもらいます。先生方からは「実際の地層を前にするよりも観察のポイントが絞れて分かりやすい」「この授業をおこなった後に実際の地層を観察させたい」などの声をいただいています。一部には「少し内容が難しい」と言われたこともありますが、そのくらいの方が児童の興味関心を引きつけるのではないかと感じています。

また博物館では昨年11月から今年の1月にかけて「わくわく科学展」を開催しました。これは小中学校の理科の授業でおこなう実験に加え、楽しみながら科学を理解できるような実験をしてもらうもので、小学校から高校まで多くの学校が訪れました。冬休みに訪れた県北の小学校の校長先生からは、この展示の出前授業を依頼されました。これをきっかけに県北や県南の3校で科学展の出前授業をおこないました。小学校の1校時は45分。最初の20分は実験の実演や説明をおこない、その後自由に体験してもらいました。3校とも全校の皆さんが体験し、最後の6年生は予定時間を大幅にオーバーしました。展示期間中や出前授業での子どもたちの様子や感想から科学への興味の大きさを知ることができました。

博物館には知的好奇心を刺激する資料等がたくさんあります。それらの中で何をどのように科学教育（理科の授業に限らず）に活用するか博物館の職員は日々考えています。

（学習振興班：大森 浩）



理科室で地層観察



体育館で静電気を体験

博物館の風景

秋田県立博物館では昨年度からは新たにフェイスブックを立ち上げ、よりリアルタイムな情報を提供することとしました。従来のホームページとあわせてご覧ください。



自然可変・生物
「秋田の釣魚大全3 イカ」



企画展「レピドプテラ」



博物館教室
「楽しい絞り染め」



アイリスの会によるワラ細工

展示活動



人文可変・考古
「縄文人のアニマル・アート」



人文可変・歴史
「秋田初の新聞 遐邇新聞」



職員の技術研修



考古ボランティア第1回例会

教育普及など



人文可変・歴史
「俺たちのスチールカメラ」



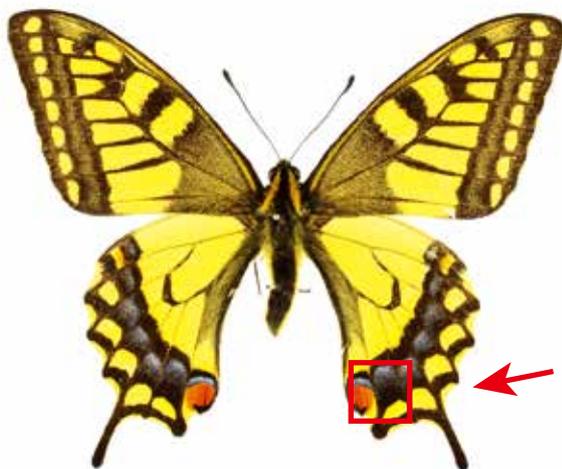
ふるさとまつり広場
「七夕絵どうろう」



友の会展示研修



秋田大学博物館見学実習



表紙クイズの答え

㊀ キアゲハ

キアゲハは人家周辺でも普通に見られるなじみ深いチョウですが、一部分だけではなかなか分からないと思います。数十倍程度の倍率で、このような世界を観察できます。